

# 権の花のよんど

梅村芳住

『お母さん。あなたは壮絶な生き方を選んだのだから、棄てた過去を拾いに戻ってこないで…もう、私たちを絶対に振り向かないで…あなたがそれを貫けたら、私、貴女の人生を評価します。……………祥子』

「権花」という機関誌に掲載されている「ある決断」という短編の投稿小説を読んだ時、物語の粗筋は、私と私の母をモデルにしたものだと思った。

その機関紙を、私に「読んでみたら？」と言って薦めたのは、清水女子大学の文学部に通っている親友の本間智子だった。智子とは、小・中学校と続いてきた友達で、その後、同じ女子高校に進んだけど、大学だけは家庭の事情もあって別々になった。でも、親交はその後も変わらずに続いていた。そのことは多分、通学する大学が同じ京都市内だったし、時間帯もほぼ同じだったから顔を合わせることも多く、共通の友達も大勢いたためだと思っている。

本好きの私に、智子から「ゼミのサークルで、季刊の文集を出してるけど、読んでみない？」と幾度か薦められていた。でも、別に読みたいとも思わなかったので、何時も曖昧に答えて手にしたことは一度も無かった。

ところが、ある時、「紀和子が書いた今度の短編、祥子のこと書いてあるわ」と智子に言われて、初めて読んでみる気になった。早田紀和子と智子は同じ大学の文学部で、ゼミが同じだったから、こんな情報は直ぐに届いた。

「紀和子は、ずっとあなたのことをライバル視しているみたいよ」と智子は言うのだが、何に對してのライバルなのか分らなかつた。私にとっては、紀和子という人物は、遠くからお高い存在だっただけに以外だった。

「それはそれは、光栄ね」と言っではみたものの、何時からそういう見方をされていたのか分らなかつた。

「あなた、意識してた？」

智子は、構うことなく心にどンドン入り込んでくる。返答に困った。

「あの人、私とは違う世界で育った人だと思っただけだから…」といい加減に答えると、

「何とも思わなかったわけ？」と興味を募らせてくる。

「そう、智子を通じて知っただけの人じゃない、思う訳が無いじゃない」

紀和子に初めて出会った時の印象をはつきり覚えていいる。大学の一年生の秋だったと思う。一般教養の体育の単位を補完する校外学習で、嵯峨野へ行ったことがあった。彼女は、智子と共にたまたまそこにきていた。彼女を一目見た時、私には「洗練された女性」という風に映った。直ぐにそのグループのリーダーだと分った。美人だった。着ているものといえば、安サラ家族には到底手の出せないようなブランドものだったし、身に着けている装飾品だって、学生がこれでもいいのか？…と思えるくらいの贅沢品だった。それらが、持って生まれた美貌をひときわ引き立たせていた。

私には、彼女との面識が無かったので、智子が紹介してくれた。ただ何となく、初対面なのに相手が私に対して興味を持った…と思った。それが紀和子との印象に残る出会いだった。でも、ただそれだけで、以後もお互いに特に親しく付き合った記憶なんてない。

母親のいない家庭の切り盛りは、父と妹たちの面倒だけでも大変な気苦労だったし、学生は総じてみんな時間を持って余しているけど、わたしには智子以外の人たちにまで付き合い範囲を広げることが出来なかった。そんな関係の彼女だから、智子たちと一緒にコンサートや観劇に行っても、社交辞令しか交わさなかったのになぜ事実を知っているのかと疑問に思ったのは確かである。

私達の仲間は、あまり他人の私生活にまで立ち入った興味を話題にしてこなかったから、以外だわ…とも思った。智子とは、家庭の内情は殆んど話題にしなかったし、受け売りとしても、何故そこまで…と思ったのも事実である。

「私ね、祥子のことは彼女に一切話してないからね」と、智子は念を押ししたが、その言い訳を反って不自然に感じた。

自分のことを興味本位に書かれるのは何れにしても不愉快なことである。場合によっては、彼女に直接会って抗議も辞さずという思いだったが、読んでみて意気込みが外れた。むしろ紀和子は、二人の女性の生き方を好意的に書いていた。

それでもその短編小説の中味、現実とはちょっと違う、こんなもんじゃなかったわ……と思っただ。ただ私の、当時十七歳だった頃の記録によく似た筋書きだと思っただけのことである。智子は、私を読み終わるのを待って口を入れてきた。

「誰から情報を取ったのかしら、こと細かに書いてあるでしょう」

彼女は、私の私生活の詳細が、智子自身の口から出たのかと思われているのかどうか

気になってるらしく探りを入れてきた。

「簡単よ、フィクションなんだから。誰かから聞いたあとの話は、想像で面白おかしく書いてあるだけじゃない。いいわよ、ほつといて…」

私のひとことで、智子はほつと安心した表情になったと感じた。

確かに、私達一家の当時の状況は、母の出走で悲惨なものだった。智子は同じクラスだったから当然そのことを知っている。マンション族だって、近所の付き合いが全くないと言っても、ここはまだ数棟が疎らに建っているだけだから自治会の連絡は欠かせない。学区も狭くて、噂は直ぐに広がった。好奇の目で見られてきた分、殻を固く閉ざして暮らしていた。

「怒ってないの」

智子は、私との友情が壊れることをとても心配している様子だった。勿論私だって壊したくはなかった。

「怒っても仕方ないって感じの程度よ」

そう言って、苦笑しながら肯いた。

さすがに物語の中身は、私の抗議を恐れてか主人公の描写や感情には普通に考えられる程度の範囲にまでしか踏み込んでいなかったし、性格や個人的な考え方までには踏み込んで触れられていない。私も、母のことでは随分と振り回されたけど、この程度なら受け入れてもいいと思った。

## 二

一人もの思いに耽るとき、決まってでてくる情景がある。もう五年も前の出来事なのに、母の鮮烈な出来事から遡って思うとき、終生忘れられぬ情景として残る。

「祥子ちゃん」

その時、私を呼ぶ声を聞いて飛び上がるほど吃驚した。

茂木壮太：名前を聞いただけでも胸がときめく男の子だった。

「一緒に帰ろうか？」

壮太は、国道を浜側に渡ったところの橋の欄干から叫んでいるので、距離はかなり離れていた。大きな声だった。でも、誰も不信に感じない程度の話し方だった。

「……」

「ねえ」

壮太は、ちつとも動こうとしない私に痺れを切らして、話し掛けながら小走りに近付い

てきた。

前夜からその日の朝にかけて、生まれてその日まで経験してきたどの出来事よりも一番衝撃的な事件に出合っていた。そのことが、本当に私の身の上に襲い掛かって来たんだ…と承知するまでには随分時間が掛かった。事実を事実として認めるまで、まだ十分に納得できていない状態のまま、結局その日は学校に出られなかった。

その朝も、学校の近くにある橋のところまでは歩いて来たけれど、公舎や校庭が見え、生徒たちの歓声が聞こえてきた途端、それ以上足を前に進めることが出来なかった。わたしには、その歓声の中に加わる資格が無いような存在に思えた。如何しても足が学校に向かなかったから、仕方なく方向を湖岸に変えて波打ち際の公園に降りて行った。

そして、ただぼんやりと、父が話した現実の出来事を繰り返し思い出していた。頭がじんじん鳴って、何度も繰り返し返し出来事をたどっているうちに、もう半日近くが過ぎていた。

一学期終了の定期試験も終わって、夏休みまでの間はクラス対抗の球技大会が行なわれていた。もともと体育は苦手な方だったし、あてにされるほどの大した戦力でもなかったから休んでいても目立たないだろうと思った。

壮太は、さつきから、私がここにおいて途方にくれている様子を見ていたんだわ…そうだ、声が掛けられずにわたしを見ていたんだ…と思った。それを感じさせるだけの躊躇した、それでも思いやりのある声の響きがあった。

壮太の母と私の母とは、お互いが子供の頃からの永い付き合いだと聞いていた。けど、母は、彼女に相談もせず、最後の言葉さえ掛けずに出奔したのである。後で分ったことだけど、わたしの母は、壮太の母に、前の晩に旅先から電話を入れていたのだ。

壮太がここに来たのは、そのことを聞き、学校を休んだ事と関連付けて、心配して家に迎えに来ただけ留守だったために私の行きそうな心当たりを朝からずっと捜していたのに違くないと思った。

「ねえ！…一緒に帰ろうや」

何かを話せば涙が溢れそうだったから、わざと意地悪みたいに黙っていた。そして、壮太から逃げるようにして、登校して来た道をまた戻っていた。

壮太は、それ以上は喋らずに、数メートルの間隔で付いて来た。帰りの道は同じだし、隣り同士のマンションだったから。

私の直ぐ後ろを、壮太が着いて歩いている…そう思うだけで胸が締め付けられるほど強く意識していた。もう少しわたしに勇気があったなら、壮太の胸に飛び込んで寂しさを癒さ

りたいのに……と小さな心を疼かせていた。

母が出奔したその時、私はまだ高校の二年生だった。二つ年下の香子と言う妹が中学校の三年生で、弟の朗は小学校の六年生だった。

父は、その夜も帰りが遅かった。もう夜の八時だというのに、母は留守だった。こんな事はよくあることなので何の不思議も姉弟みんな感じていなかった。

その夜に、母が私達に作ってくれていたご馳走は、特に豪華で、妹や弟は感動してはしゃぎながら食べてたっけ。何も知らずに……。

雨の少ない雨期の終わりの頃、夏休み間近かだった。親のいない、子供だけの何時もの食卓で。

「今年の花火大会にね、お友達呼んでもいい？」と妹が聞いた。

浜一帯に打ち上げられる花火は、特に妹の部屋から良く見えた。

「また、新しいお友達が出来たのね」

狭い部屋だから、何時もと言う訳にはいかないが、香子は新しい友達ができると家に招いた。それは、父方の祖母から母へと引き継がれてきた淵田家の躰でもあった。

「この春、お父さんの転勤で仙台から引越してきた子なの。感じの良い子」

「……」

「構わないよ……」と言う代わりに、うんうんと首を上下に振っていた。

たったふたつ違いだけなのに、香子はわたしにべったりで、自分だけでは何も判断できない子だった。

熱い夜だった。もうじき琵琶湖の花火大会の日が来る。マンションの住民が、まるで旧知の間柄だったかのように、打ち解けて話のできる唯一の屋上集会。それを思つと心が弾んだ。壮太の母と、私の母は、この地出身の幼馴染だったし、家族ぐるみでよく遠足をした。ませていた私は、壮太が中学になった頃から、彼に男を感じていた。異性を意識した最初の人だった。優しくつたし物事に対する判断力にも優れていた。

その夜、父の帰りは深夜になった。気配を感じて、父の帰りを確かめに、そっと父母の間を覗いた。

父は、母といつも一緒に居る居間で着替えをしていた。

「祥子か？……うん」

そう言ったきり、父は応接室を指差した。熱いから長話はそこでしよつとする意図なん

だ…と思った。父より先に応接間に入ってクーラーのスイッチを入れて、父が着替えてやってくるのを待っていた。

父は、その日に限って「お母さんは？」とは聞かなかった。そのことが不思議だった。自分の動悸が耳元でジャーンと鳴った音を聞いた。

父は間もなく入ってきて、ソファに腰を落としたまましばらく黙っていた。

「お母さんに、何かあったの？」

多分私の声は震えていたと思う。

「そう…あったんだ」

父はそう言ったきりまた暫らく黙って、ただぼんやりと天井を見つめていた。

「帰りに、長岡京のお祖父さんのところに寄って来た」

長岡京市には、母の実家があった。

実家には、祖父も、祖母も、もう八十を超えた歳になっていたけど、長男の伯父夫婦と、元気で暮らしていた。

「祥子は、もうおとなの考えを持っているから、何もかも話しておいた方が良く、伯父さんたちも言ったから…」

「何なの？…」

私の声は、きつと悲痛になっていたと思う。

父は、両手を口にやり、一日の疲れで伸びた口の髭を掃くように触っていた。

「今日の昼前に、会社に、匿名の親展文がお父さん宛てに届いてね…」

「…」

「会社ではよくあることだから、気にも留めずに開封したら…お母さんからだった…」

「何故？」

「内容が、顔を合わせては言えないことだったんだ」

「一瞬、私の顔が強張った。」

「家出したんだ」

父は素早くさらっと言った。

「何故？」

また同じ言葉を繰り返していた。

「今朝、お父さんたちを送り出したあとで、お母さんは家を出たんだ」

「…どうしてそんなことするの？」

「言い難いことだが、お母さんに好きな人が出来たんだ」

ドキツとした。以外だった。悔しさが胸を一杯にした。

「家族よりも？」

確かめずにはいられなかった。

「そう、お母さんにとつてはね」

父の言葉を聞いて、むらむらと怒りが湧いてきた。

「許せない！」

情けないけど、そう呟いて号泣した。

それ以上は、もう何も聞けない私に向かつて、父は淡々と経緯を話していた。

相手の男の名は、塚本祐樹という父の会社の部下で、大学も確か後輩の筈だった。家族ぐるみの付き合いをしていて、わたしも何度か会っていた。家で一緒に食事をしたこともあったし、好感の持てる小父さんだった。

家族ぐるみで親しくしていたのに、二人はそれぞれの家族を裏切ったのだ。

「塚本君が、函館へ転勤だね。お母さんはついて行ったんだ」

「？」

「塚本君は、希望で単身赴任だった。子供も小さいのに何故だろうと思ってたら、矢張りそんなことだったんだ」

頬をぼたぼた涙が流れ落ちるのを感じていた。

「伯父さんがね、お母さんの電話受けて直ぐに函館に飛んでくれた」

函館には、母の親しい従姉が居た。母にして見れば、相談できる人が身近にいる訳だ。

「香子や朗には、明日お父さんが帰ってきてから話すから、祥子はそれまで黙ってて…いいね」

わたし、ハンカチがぐしょぐしょに濡れるほど涙溢（こぼ）してた。

父はそんなわたしの肩を抱いて、

「お母さんは、寂しかったんだよきつと」

自虐的にそう言った。

「お父さんがそんなこと言うこと無いわ、家族のために一生懸命に働いてくれたこと、私達知ってるもん」

「香子や朗には、お父さんから明日にでも言うからね。祥子からは何も言わないで…」  
いま言ったばかりのことを、父は念を押すように繰り返すそう言った。

父の汗臭い胸に頬を埋めて、しゃくりあげながらうんうんと首を振った。

「私ね、明日から絶対に泣かないからね…お願いだから…お父さん…今夜だけは泣かせてね」

父の胸に顔を埋めて、涙と漬で父のシャツをびしょびしょにして泣いた。

「いいんだよ、幾ら泣いても。祥子、お父さんを許しとくれ。お母さんの寂しさに全く気が付かなかった」

「そんなの厭よ！お父さんは悪くない！…みんなみんなあの人が悪いの！」

「お母さんにも言い分はあるさ」

「無い！…そんなもの無い！」

どうしようもなく、怒りの矛先を父に向けてた。

「夫婦つてのは、他人の部分もある。もつと労わりあうべきだったんだ」

「そんなの無い！…お父さんは絶対に悪くない！…あんなひと大嫌いっ！」

悪いけど、母をわたしはもう『お母さん』と甘えた呼び方で接する気になれなくなっていった。もう他人だった。

そう、もう『あの人』だった。

あの人は、一学期終了の定期試験が終わる時期を見計らって家を出た。

「せめてもの思い遣りよ！」と棄て台詞を言っているようなタイミングだった。悔しかった。

前の晩にそんなことがあって、殆んど眠れない夜を過ごしていた。

壮太は、浜のマンションに入って行く私の背中に向かって、

「何時でも、待ってるからね。母も家に遊びに来るように伝えといてくれて…」

その声を背中で聞いて、悪かったけどタイミング良く開いていたエレベーターに駆け込んだ。

何時もの部屋には、強烈な西日が差し込んでいた。カーテンを引いて、東の方角の眼下に広がる湖面のきらきら光る小波をじっと見つめていた。悲しかったあの日。許せない人の強烈な思い出がある。

### 三

伯父が、函館から何の成果も持たずに帰って来ると、早速長岡京で親族会議がひらかれた。あの人の両親と兄妹とその配偶者達に、父と私が加わった。伯父から、徒労に終わった説得の経過が報告され、誰かの通夜みたいな陰気な会議が続いた。



私は、悔しかったから言った。

「自尊心の強いあの人のことだから、謝ってまで自宅には帰りたくないわけよ。自活するために、自慢の髪の毛を切り売りしても帰らないと言ったのなら、丸刈りになるまで売ればいいんだ。函館で、地を這ってでも自分で生活して行くなんて言ったこと、当たり前のことでも立派ね。でも、わたしたちより幸せになるなんて許せない。わたしたちより惨めな生活送ってくればそれで満足よ」

言い方には、随分と棘があった。十七歳の女の子が言うべき言葉では無かったかも知れない。でも、私は意地になって、意識して言った。当然のことだけれど、祖父母も伯父も、私の性格知り尽くした親族達はみんな承知の上で苦笑いしながら聞いていた。

母の厭な面を随分見てきた。父の頭髪の波をさも愛しそうに直したり。屈んで靴の埃りを素手で拭き取ったり。玄関から下りのエレベーターのところまで、僅か数メートルの見送りにカバンを抱えて並んで歩く。そんな仕事は多分長岡京の祖母譲りなんだろうけど、これ見よがしで厭だった。

父を、まるで自分の一部であるかのように感じている。そんなところが見え見えで不愉快だった。そう感じ出したのは、私が小学校を卒業して中学に入る間の春休みの頃からだったような気がする。

私に気が付いた頃には、もう母には、有頂天にさせる人がいて、その引け目の部分で父に償いをしていたのか…それとも罪の呵責に耐え兼ねて、詫びる気持がそうさせていたのかは定かで無いけど、故意（わざ）とらしくて厭だった。

私は、もう思春期で、私の大事な父にそんなことをして欲しくなかったからだったのかも知れない。

そう、その時とった偶然の電話の受話器、あの人がからだった。あの人が言い訳をする前に、心の中にある恨みが爆発していた。

「あんななんかもう、死んだ人だと思ってる。だから絶対に干渉しないで…死んでくれた方が良かったって、づうづうと思ってきたんだから…」

「…」

「あなたは許さない。絶対に許さないからそのことだけは覚えといて…じゃ、切るから」  
相手の話、全く聞いてなかったあの日の私。

「待つて…！…もうちょっとだけ喋らせて…お願いだから」

あの人は、切られたら最後だと思ったのか、必死で電話の向こう側で喚いていた。

「ちよつとだけよ」

私の声は怒りで震えていた。

「お母さんが、若しもよ。若しも死んだとしても、お葬式にさえ来てくれない訳？」

あの気の強い人が、気弱な声で話した。

「そうよ、そういう訳よ。離婚の手続きも終わったし、もう何にも関係ないんだから、弟や妹の神経をくすぐるようなことだけはしないで。私が必死で支えてきたことを無為にするようなことしたら恨むから…死んでくれた方が良かったってのもうこれ以上は思わせないで」

「これ以上私に恨みごと言わせないで…」と言うつもりが、もっと強い言い方になっていた。幾ら罵倒しても、仕切れないくらいあの人には恨み言を言いたかった。何故こんなに人を憎めるのかわからなかった。

「祥子から、死ね！死ね！って何度も言われたこと、私も忘れない」

あの人のせめてもの反撃だったのだろう。けど、その言葉は弱々しかった。

「そうよ、ほんとに死ねばいいのになって思ってたから。そうすれば。私が長生きしてるうちに、何時か許せる日も来るかも…って考えたことあったから、ほんのちよっぴりだけどね」季節は、もう間近まで冬が迫っていた。

その頃、もう既に、塚本祐樹は幼い子供たちを捨てた自分に耐えられなくなって、あの人と別れ、妻と子を函館に呼び寄せていた。あの人は見放された訳だ。

「ざまあ〜見ろだ！」

もう一人の嫌な私が心の中で喝采を叫んでいた。

妹の誕生日は十一月末だった。匿名の送り主から、香子好みの有名ブランドのマフラーが送られてきた。あの人からの電話は、その確認のものだったが、たまたまその電話を取った私は、一気に不愉快だった当時の不満が爆発したのだった。言うことだけ言ったらすつとした。

贈り物を受け取った香子は「お母さんからだわ…」と胸に迫る思いを詰まらせながら、声を震わせてそう言った。

「そんなことくらいで許す気になんかならないでね」  
意地悪くそう言って自分の部屋に駆け込んだ。

「厭なやつー！」

もう一人の私に向ってそう言っていた。母のことになると、自分の性格がだんだん悪く

なっていく…と感じていた。

両親の離婚手続きは、秋の初めにはもう済んでいた。勿論、断固薦めたのはわたし。それが済んだらほっとした。渋る父を唆（そそのか）したのも私だった。その時、その分父に尽くすと誓った。もうあの人は、淵田家とは関係ないんだとふっ切れて、私の身辺にも徐々に落ち着きができてきた。近所付き合いはほとんど無かったから助かったが、学校では直ぐ噂になった。それにも耐えた。

担任の先生が、父とは高校の同級生だったこともあって、ホームルームの時間をわざわざ割いて、みんなに納得の行く説明をしてくれた。私はその時間は席を外し、みんなが話を聞いている間、あの校庭の先にある湖岸公園で時間を潰していた。

級友たちは、励ましてくれた。悪い噂もあつたけど、男と女の愛情の持ち方や、生理的な面にまで言及した先生の勇氣はみんな評価したみたいだった。

あの人がいない我が家は、矢張り寂しかった。弱音は吐けないが、あの人の存在感は重かった。留守の家へ鍵を開けて入るのは辛かった。でも、それにも、徐々に慣れてきた。

気の毒なのは父だった。信頼してきた後輩と、安心して家庭を任せてきた妻に裏切られたのだから…。

でも、悲しみや苦しみは、時間が徐々にその傷を癒してくれた。妹も弟も、性格的には明るい方だったから、父もわたしも随分助かった。

#### 四

その年の暮れのこと。私は久し振りに浜の商店街へ買い物に出かけた。街にはクリスマスツリーや歳末商戦のイルミネーションが飾られていた。

お正月が近付いて来たことは、肌で感じる風の冷たさと、普段は静かな商店街が一気に活気付く。そんな慌しさが道行く人々にも溢れてくる。日本人って、お祭り好きで、歳末にも特別な感情を抱く国民なのかと思う。私も、こんな雰囲気が好きだった。なのに…今年の師走は…そう思うと気が滅入った。

長岡京とも決別宣言をしていた。私達の一家は、毎年、長岡京で年越しをしてきた。今度のお正月は、わたしがそれを許さなかった。淵田家だけで、初めて迎えるお正月。あの人のいない初めてのお正月。そして、私が仕切ることになる、初めてのおせち料理。

お膳を飾るご馳走の献立を、香子と二人であれこれ考えていた。伯父は、例年通り里帰りを進めてくれたけど、敢えて断った。

その日は、わたし、浜の紀伊国屋へ、正月三ヶ日に読む本を買い求めに行った。近くに

市立の図書館もあったけど、正月くらいは自分の愛読書を持とうとしていた。文庫本や参考書など、大きな店内のあちこちを物色していると、とんとんと肩を叩く誰かがいた。振り向くと、そこに壮太がにこにこ顔で立っていた。

「あらっ…」

もう真っ赤になっっているのが自分でも分った。

「もう大学受験の準備かい？」

壮太の口調は何時も優しい。

「違うわよ。お料理の本よ」

「へーえ」

壮太は、驚きの表情を見せた。きまり悪そうに黙って首を振り、

「ごめん ごめん」と言った。

二人は、必要な本を買って、それから近くの喫茶店へ行くことにした。あの日以来、私が壮太を避けていたから二人つきりになるのは初めてだった。

積もる話が沢山あったけど、あの人のことは一切話題にしなかった。意識しすぎているように不自然なくらいに…。

「家へ寄らないか？…母も随分前から祥子ちゃんの顔を見たがっているからね」

壮太に勧められて、ちょっと立ち寄ってみることにした。壮太の住むマンションは、浜とJR大津駅との間にある高層住宅である。

壮太に案内されて、十二階建ての最上階にある彼の家に行った。何度となく訪れた茂木家である。何の抵抗も感じないで家に入った。

「こんにちは」

「ただ今、お母さん。祥子ちゃんを連れてきたよ」

奥に向かって声を掛けたが、返事は無かった。

「あれっ…いないのかな。まあいいや、座れよ」

壮太は、もう大人だと思つ。口ひげの剃り際も青く鮮やかだった。二人は続きの話をした。時間を見ると、もう三時を回っている。

「夕飯の準備があるからもう帰らないと…小母さんに宜しく言っておいてね。また寄せていただくわ」

そう言つて玄関口まで行った時、壮太に両背を掴まれた。

「祥子ちゃん…」

不意だった。胸がどきどきしたけど怖くなかった。それでも、無視して靴を履こうとした。こんな機会を随分前から待っていたような気がしていた。どうしていいのかわらずに、ただ気が持たず、胸の高鳴りが聞こえるようだった。

その時、突然ドアが開いて、壮太の母の底抜けに明るい声が響いた。壮太はそっと私から離れた。

「あらあら、祥子ちゃん。ようこそ」

「留守にお邪魔してました。有り難うございました」

声が上がっているのが自分でも分った。

「いいじゃないの、もつとゆっくりしていつてよ。折角きてくれたんだから」

懐かしそうに小母さんは言ってくれた。

「夕飯の準備があるんだって」

壮太は、動揺を隠せないままにそう言った。私の肩に、壮太の力強い指の感触が残った。

あの時振り向いていたら、壮太はいつたい何をしたのだろう？…胸がきゅんと鳴るような快感だった。嬉しかったのに、態度で応じられなかった。

## 五

年が明けて、瞬く間に春が来た。でも、淵田家には、あの人が心配するようなことは何も起こらなかった。平凡だったけど、あの人のいない家庭の中にも、それなりの明るさが蘇った感じだった。妹も、希望してたわたしと同じ高校に入れたし、弟も中校生になった。

「初めからあの人はいなかった…と思つたら、それで良かったんだわ」

私の愚痴を、父は黙って聞いている。私には、父の身の回りの世話をしているという大きな自負があった。

悲劇が起こったのは、例年よりも早い春の訪れが桜の花びらを奪っていった四月上旬のことである。

香子と朗宛の宅急便が届いた。誰もいなかったから、私が受け取った。差出人名の無い贈り物が届くのは、香子の誕生日の贈り物が届いて以来のことだった。また、あの人から合格祝い品が届けられたのだと思つた。先の時も、私の剣幕に懲りてずっと自重していたから、もう母の資格をあの人は放棄してくれたんだと安心してたのに。

むらむらと怒りが込み上げてきた。しかし、送り主の欄は空白になっていて、怒りをぶつける相手が得ているのかどうか断定できない歯がゆさがあった。あの日以来疎遠にしている、長岡京の祖母からかも知れなかったし、伯母からかも知れなかった。

贈り物は、時節柄、入学祝だと直感したに過ぎないけれど、二人が帰ってきてから、私の目の前で開けさせようと思っていた。

そんな矢先に電話が掛かってきた。

「もしもし…」

紛れもなくあの人の声だった。直ぐに応答が出来なかった。

「祥子ね…」

馴れ馴れしい昔の、何時もの声だった。自分本位で子供を操れると勘違いしていた頃の、母の傲慢な声だった。

「何故黙ってるの？」

その声が、以前のように媚びるようなこともなく、傲慢に聞こえてきた。

私の自制心がぶつくと干切れる音を聞いたような気がする。もう過去を帳消しにしようとしているのか、それとも開き直っているとしたか思えないような声だった。

「そつよ、祥子よ。…何？」

「お元気そつね」

開き直った、ふてぶてしい声である。

「みんな元気で頑張ってるわよ。あなたには関係の無いわたしたちの家族だから、構わないで…用件は何？」

「…何も無かったら、電話をしてはいけないの？」

「何も無かったら、電話する必要ないわけよ。構わないでって言うてるでしょうが…」

「随分と冷たい言い方ね」

「私ね、あなたのお陰で冷たい女になったの…関係ない人から、そんな風に言われたくは無いわよ」

「自分の血を分けた子供から、そんな扱いを受ける結果になるなんて信じられない」  
明らかにヒステリックになっっている声だった。

「いい言い草ね。勝手なことをしといて。無責任にも家族を棄てて…あなたのしたことは、教養のある女のすることじゃないわ。あなたは、私がまだ子供だった頃、『人間が、この地球上の自然界で、生きとしいけるものの頂点にいられるのは、正しい伝達能力を持ち、正しい教育を受け、秩序正しく生きる社会動物だからなのよ…だから、窮屈なようでも規則（きまり）はキチット守らないといけないの』って、私に教えたこと覚えている？…その論理だと、あなたには、子供を産む資格も家族を持つ資格も無かったわけだから、関係の無くな

った私達の家庭にちよっかいを出すようなことはもうしないでくれる…迷惑なんだから」

電話だと顔が見えないから、随分と言いたい放題のことが言えた。ああ言えばこつ言つの状態になって、もう二人とも興奮していて、何を言ったのかも不確かなくらいの暴言を吐き合った。あの人も、私も言いたい放題の舌戦を展開していたのだろう。誰かが聞いていたら、日常との格差にきつと驚くに違いないと思いつつも、果てしなく続きそうな状況にいらいらが募ってきた。

「祥子だけだと思つたよ。そこまでお母さんを否定するのは…私だけが悪かったのかしら?…祥子には、償いをしてもらえないわけ?…永遠に?」

「そう、あんなだけが悪かったの。だから私は永遠に許さないわけよ。私の今日までの青春って、一体何だったんだろうかと考えてみることもあるわ…あなたの所為(せい)で、めっちゃめにされたのよ。許せるわけ無いじゃない」

「あなた、何時か私に死んでくれて言つたわね。今でもそんなにわたしが憎いわけ?」

「そうよ、憎んでる!…生きている限り許さない!」

語気を荒げて言つた。暫らく間が空いて、

「ひいーっ」という悲鳴が上がった。電話の向こう側から、あの人の烈しい泣き声が聞こえてきた。

私も、涙が両方の頬を伝わって落ちるのを感じていた。でも、泣き声だけは出さなかった。しばらくは無言だった。

「あなたには負けないわ…妹や弟は、一生賭けても護り抜くわ!…あなたの棄てた子供たちは、あなたが育てたよりも立派に育てるから、もう二度と私達の家庭に関わり合おうとは思わないで。それが最大の償いになるのよ」

一方的に喋つた。そして、また長い沈黙があつて、

「贈つた品物は、香子と朗にだから、それだけは渡しておいて欲しいの。お願いだから急に弱々しい声になって、やつとそれだけ言つた。」

「渡すだけよ。その後如何するかはあの子たちが決めることだから。もういいわね、電話切るわよ。あなたが、この世に生きているって思うだけで、私は呪われてるようで厭なのよっ!」

わたし、自分の怒気に酔つてたみたいだった。

「あああ〜っ……………」

あの人は、声をあげて泣いていた。立っていられないような泣き方だった。それでも私

は、『お母さん!』とひとこと呼んであげられなかった。

四月の函館は、まだ真冬の季節を引き摺っていると聞いている。あの人は、常用していた睡眠薬を飲んで、雪山で故意に凍死した。私に電話が入って間もなくの、丁度、思い当たるその頃だった。

そんなに弱い母だとは思わなかったのに…何故…今頃になって?

私とあの人の電話でのやり取り、そのことは誰にも話していない。

訃報が淵田家に届いたのは、その年の初夏になってからだった。そこまで引き伸ばしたのは、祖父の配慮でもあった。

「直ぐには知らせるな、淵田の家族が苦しむだけだから」

祖父は、悲しみに沈んだ重い声で、うめくように言ったそうである。

「家族だけの密葬にしよう」

従姉の手配で、現地で仮通夜が営まれ、荼毘に付された…と聞いた。

遺骨は、祖父と伯父夫婦に抱かれて長岡京に持ち帰られ、朝日家の一族の手によって密葬が行なわれた。その詳細は、朝日家の願い寺で、満中陰の法要が行なわれた後で、伯父から父に伝えられたのだった。

父は伯父から聞いたその日の夕食の時、わたしと香子と朗の前で詳しい話をした。あの人が出奔の時と同じように、香子は声をあげて泣いた。

「関係の無いことだわ」

私は、それでもそんなことを言ったような気がする。

朗はもう中学の一年生で、沈んで目を潤ませていたが泣くことは無かった。私は、平気を装っていた。胸に火箸を差し込まれたような痛みが走ったが泣かなかった。涙にも絶えることが出来たけど、出奔の時とは違う衝撃に襲われた。

それから私…、自分の部屋に閉じこもり目が赤くはれるまで涙を流したの。何故、こん

な気分になるのか分らないけど悲しかった。説明のつかない悲しさだった。もう、怒りをぶつつける相手がこの世から消えてしまったからかしら…寂寥感が、胸にどっと溢れたの。

そして、こんな時こそ、壮太に会おうと思った。父のそれとは違う、男の胸で強く抱きしめて欲しいと思った。



親愛なる早田紀和子さまへ

淵田祥子

「槿花」に登載された貴女の短編小説、「ある決断」を読ませて頂きました。貴女は、主人公の生き方を美化し、その母に称賛ををおくって居られるような書き方をされておられますが、現実には決してそんなものじゃなかったのです。私が、まるで渦中の主人公だなんて、思い込んでる訳ではありませんが、「あんたがモデルよ……」って言う人が居ましたから、お便りする気になりました。不躰をお許しください。

でも、貴女のような方に、関心を持つて頂いたことに感謝しています。

この貴女への告白は、槿の花のように生きた母の、今だからお話できる、事実に沿った総てだと信じて頂ければ幸いです。

母の死を乗り越えて、私は少しは成長したかしら……と思うことがあります。

現在、就職活動の真っ最中です。希望は、東京勤務ができる企業なら何処でもいいと思っています。

過去の柵と悲しみを棄てて、新しい自分を見つげるために、二十二年間住み慣れた関西を離れたいと思います。それともう一つ、壮太の就職先が東京に決まったから付いて行きたいのです。

終わり

銀華文学賞応募作品

「槿の花のよつば」

(1) 氏名

梅村芳住

(2) 住所 千五二〇 〇〇四六

滋賀県大津市長等二丁目五番八号

(3) 電話番号 〇七七 五二五 二三九四

(4) 職業 滋賀県商工会連合会 相談役

(5) 略歴 滋賀県職員として四十年

滋賀県外郭団体の役員として五年

現在・非常勤の相談役

SOTーチラン滋賀実行委員会事務局長

(6) 応募作品の原稿枚数は…四十字×三十行〃十七枚です。

## 銀華文学賞応募作品

権の花のよつに

作  
梅  
村  
芳  
住